みず　　ぐるま

水　車

(財)新松戸郷土資料館館報　第13号

財団法人　新松戸郷土資料館

〒270-0034　千葉県松戸市新松戸3－27
新松戸市民センター（三階）
電話　047－344－1909

発行年月日　平成12年3月末日

もくじ

魚取り……表紙

坂川水系の漁
◇堀汲み漁・鰻掻き鎌漁・かっつくい漁・しかんご漁・笹葉漁・鯰の冬眠期の漁…2
◇寒鮒釣・都たなご釣・押し網漁・泥鰌掘り・鯉取……3
◇雀取・日誌抄・ご案内・編集後記……4

坂川水系の漁

堀汲の堀

坂川水系の漁は、魚の習性を利用した漁で春の産卵期、水田の用排水期、雨期、冬眠期などに盛んに行われました。

これらの漁は、昭和三十年位までどこにでも見られました。

堀汲み漁

この漁は、農家の副業となる漁で、漁の中では一番高値で取引され、しかも農家の大切な収入源でした。

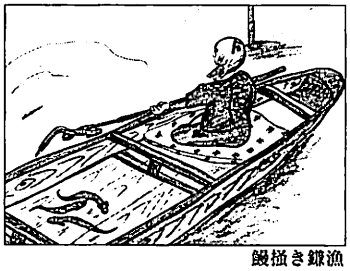
堀は、魚の多く出入りする用排水路の所に水口を付けます。用排水路より二メートルほど深く掘り堀の回りに柳を植えます。「うろ」という横穴を一メートルほど掘り、「うろ」の中に柳の木や根を入れ、入口を柳の枝や葦で囲み魚の寝床を三つほど作ります。「うろ」は北かまたは、西向きの魚の好む方向に作りました。

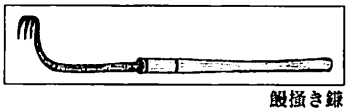
堀の表面に柳の枝を入れ、魚が住みつくようにして冬を待ちます。十二月から二月までの漁で、水は水車やうつるで掻きだし「うろ」を開き、鯰や鮒を掻きだして取る確率のよい漁でした。坂川の回りの農家には、沢山あった堀の漁でした。

鰻掻き鎌漁

冬眠期になると、鰻掻き鎌漁が盛んになり、穴さえ見つければ鰻は、簡単にとれました。

川床の土の中にいるのを見つけるのは、漁師でも長い経験が必要でした。穴が見つかれば、その穴に鰻が出られないように船の竿を挿し、竿の回りを鰻鎌を使って掻き取る漁でした。


鰻掻き鎌漁


鰻掻き鎌

かっつくい漁

かっつくい漁は真冬の鮒漁で、十二月から二月までの坂川で行われました。坂川一面に氷が張るころがよく、太陽がでて、少し氷がゆるみはじめたころ、田舟の先に乗り、藻や草などの中に冬眠している鮒を舟竿で追い出します。すると鮒は一メートルほど泳いで川床の土の中に潜ります。それをねらって玉網で鮒の頭の方から掬い取る漁で、川床まで水が透き通り水深四、五十センチメートル位の状態の冬の坂川の漁でした。

また深所の鮒漁は、天保銭網漁といいます。田舟で近寄り、そこから一メートルほど下流に網を沈め、田舟の竿で鮒を追い入れる漁で、かっつくい漁と違い網の見えない位水が濁っている方が成果がありました。

かっつくい漁

どちらも鮒の動きの鈍い午前中の漁で、なかなかの大物がとれました。

しかんご漁

しかんご引といって台地の人がした漁でした。坂川や添堀などの浅い川で、四、五人そろって行う真冬の小魚漁です。川の縁から、長い竿の先につけた三角の籠をいれ、引き寄せる簡単な漁でした。台地の人達にとっては楽しみなものでしたが、下谷の路に掻きあげた泥土を、そのままにして引き上げてしまうので、下谷の人からは嫌われた漁でした。

笹葉漁

この漁も冬の流れの少ない圦樋などの、魚のあつまりそうなところに細工をします。孟宗竹の枝を束ね、水に流れないように草や木に繋ぎ止めておきます。漁をするときは、大きな玉網を竹の下に静かに落とし入れてとります。取れる魚は小海老が主で明治期には盛んだったようです。

鯰の冬眠期の漁

鯰は川の淵に横穴を掘り、集団で冬眠します。この習性を識っている人の漁で、川の中をじっとのぞき、

淵の所から濁り水が少しずつ出ているのを見つけることが決め手です。濁り水の出ている横穴を草でふさぎ、横穴の上の部分から穴を掘り手づかみで鯰をとります。流山の鰭ケ崎の漁師の洞下さんという人は、この方法で一つの穴で一〇七匹も鯰をとり、農業も放って鯰取りに夢中になり、手も腕も輝だらけになってしまったそうです。

鯰の冬眠期の漁

寒鮒釣

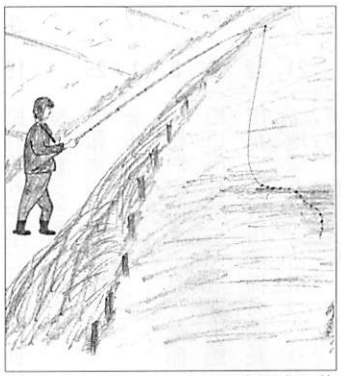
下谷の寒鮒釣は、堀での釣です。頭の上には柳の木があり、堀の中にも柳の枝が多くいれてあり、うろのそばに釣り糸をさげるのはよほどの人でなければできませんでした。

竿は撓る竿は不向きで、篠竹の一本ものの竿に一メートルほどの釣り糸をつけます。浮きは白の玉浮きに糸を通し、枝にふれないようにします。釣餌は赤虫を四、五匹つけ、わずかな枝の間からうろの前に糸をいれます。これが大変難しく子供にはできないことでした。水が少しゆるみはじめた頃の風の無い静かな日中の釣りで、大型の真鮒釣りでした。

寒鮒釣

都たなご釣

たなごは、深場の流れのある所に多く集まります。坂川の深場は川の蛇行している所がポイントで、数ケ所ありました。たなご釣は東京方面のいわゆる旦那と呼ばれるような人達の漁でした。服装も釣具も高価なもので、竿は十二本つなぎの細竿で、浮きは糸を通す丸の白で、米粒ほどの大きさの浮きを十二、三個つけ、餌は、いがらという毒虫の幼虫を針につけます。この時にたなごの口にあうようににぎり挟みでいがらを切ります。釣り糸は川床をはうように流し、浮きの動きをみながらの釣りで、坂川の釣りの中でもっとも贅沢な釣りといわれていました。


都たなご釣

泥鰌掘り

用排水路に水がなくなると、泥鰌は川床の土の中にもぐります。その土を手で掘返し、土の中にいる泥鰌を手掴みでとる漁で、思いもよらぬほどの大漁になることもありました。

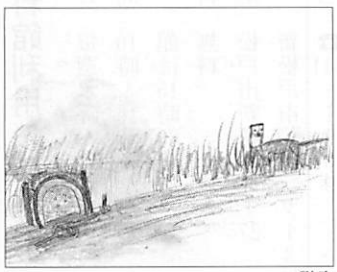
泥鰌掘り

押し網漁

冬眠期の漁で、藻や草の中に小魚などが潜んでいる所をねらいます。長い竿の先に入り口の広い網で押してすくい取る漁です。池や用排水路などの浅く流れの少ない川での漁で子供のよくした漁でした。

鼬（いたち）取

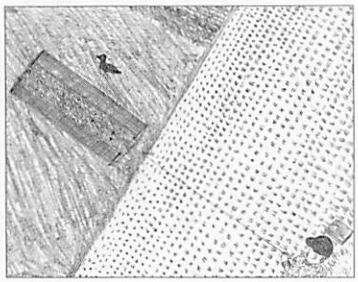
下谷は、鼬が多くいた所でした。プロの人達が、毛皮として利用するために、十二月から二月にかけてきました。昼間の内に鼬の足跡を見つけておき、夕方になると輪縄を、夜行性の鼬の通りそうな橋の下や、排水路の土管の入り口などに仕掛けて置きます。翌朝仕掛けを見にいきます。下谷では、鶏を飼う家が多く、鼬は鶏の生き血を吸うのできらわれ、鼬取がくるのを待っていました。


鼬取

雀取

無双網による雀取は、昭和二十年代にナイロン糸が出はじめてから、急に盛んになりました。

穭田（ひつじだ）を選ぶことがこつで、囮に雀を籠に十羽ほどいれ、穭田（ひつじだ）の中に見えないようにして鳴かしておきます。また雀が安心して降りてくるように網の近くに紐で繋いでおくと、さらに警戒心がうすれます。網は黒で幅は一メートルほどで、長さは二十メートルほどの網を二枚ひろげて張ります。五十メートルほどはなれた所で網を引く用意をしておきます。網と網の間に雀が降りてくると、雀取は網をすばやく引きます。網は左右から雀に覆い被ぶさり、垂直に飛び上がれないため一網打尽になります。しかし、一度網から逃れた雀は二度とその網には近づかないということです。



雀取

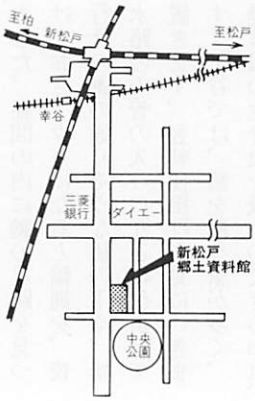
日誌抄

平成11年

1・6	全体会議
〃・27	旭町小学校三年生見学
〃・28	小金北小学校三年生見学
2・3	全体会議
3・3	全体会議
〃・6	河川フォーラム会議出席
〃・9	新館員研修会（資料館）
〃・17	博物館研修参加（館員）
〃・25	理事会
4・7	全体会議
〃・15	「水車」12号発刊
〃・17	石碑除幕式館長出席
〃・22	幸谷小学校三年生見学
〃・23	馬橋北小学校三年生見学
5・5	全体会議
〃・12	新松戸西小学校三年生見学
〃・24	理事会
〃・26	「平成11年度河川功労賞」館長受賞
6・2	全体会議
〃・5	公開講座「松戸の開拓史」
〃・11	ビオトープ会議館長出席
〃・14	館長講演（馬橋小学校）
〃・15	研修（大利根博物館他）
7・7	全体会議
〃・22・23	第16回夏休み子供歴史教室
7・31	新坂川の田舟紀行
8・1	松戸市青年会議所取材協力
〃・4	全体会議
〃・24	ビオトープ会議館長出席
〃・27	子供歴史教室再会日
9・1	全体会議
〃・5	「田舟を漕ごう」新坂川
10・2	馬橋北小学校六年生見学
〃・6	全体会議
〃・11	松戸鯨の食文化を守る会
〃・26	研修（関宿博物館）
〃・〃	河川愛護団体懇談会出席
〃・30	貝の花小学校四年生見学
11・4	全体会議
〃・7	新幸谷橋開通式館長出席
〃・12	「松戸史跡めぐり」来館
〃・14	県立船橋高校生見学
〃・18	松戸第五中学二年生一日体験研修（当資料館）
〃・25	広報まつど取材協力
12・1	全体会議
〃・3	「松戸史跡めぐり」来館
〃・8	松戸市役所こども課来館
〃・12	田舟で新坂川清掃（館長）
〃・21	「地域と考える川づくり懇談会」館長出席
〃・26	絵本「まつどのむかしばなし」発刊
〃・27	仕事納

〈資料館利用のご案内〉

▽開館日　毎週水曜～日曜日
▽時　間　10時～16時（ただし、入館は15時30分迄）
▽入館料　無料
▽所在地　松戸市新松戸3－27
　新松戸市民センター3階
▽電　話　☎344・1909



編集後記

戦前までの河川の漁を収集しました。子供も大人もプロの漁師も、川と親しみ、川を汚さずに人と魚との共生をしてきました。戦後の五十年間河川は汚れ放題でしたが、この所川は見直され、水も透明度が高くなりはじめました。釣りを楽しむ人の数も増え、河川敷も人を受け入れるようなものになって来ました。夏以降の漁は次号の予定です。